アカウミガメ

「保全と経済両立重要」

東京都市大の田中研究室　下田でワークショップ

下田市の海岸でアカウミガメの産卵地調査を続ける東京都市大環境学部の田中章研究室は22日、「第7回伊豆半島の自然環境保全と利用のためのワークショップ」を下田市民文化会館で開催した。同研究室の学生や有志市民約50人が参加し、研究成果の発表や意見交換を通じてアカウミガメの産卵地を含む伊豆半島の自然環境保全のあり方と利用について考えた。

はじめに学生がアカウミガメの生態や産卵地の重要性、実態を説明した。「北太平洋を回遊するアカウミガメの95％が日本で産卵しているが、ごみや乱獲、砂浜の減少などに伴い静岡県では最も危険度の高い絶滅危惧種Ⅰ類に位置づけられている」と指摘。下田市と南伊豆町の海浜でアカウミガメが産卵していることを知っている人は6％とのアンケート結果を示し「保全に向け、まず産卵の事実を知ってもらうことが必要」とした。

今後の課題として認知度のアップや保全に向けた実践活動（海岸にある自動販売機の光量の削減や海浜パトロールなど）などを挙げ、将来的には保全と経済活動の両立（エコツーリズムなど）が重要とした。

伊豆でのアカウミガメの調査、研究成果を発表する学生＝下田市民文化会館

この後、田中教授が「保全と経済活動のバランス」を解説。3グループに分かれ「保全と経済活動の両立」をテーマに議論を深めた。

同研究室は毎年、下田で夏合宿を行っている。2010年、自動販売機の光を海面に映る星明かりと間違って集まり、干からびて死んでいる稚ガメを発見した。これを機に翌年から「アカウミガメの産卵地保全」をテーマに勉強会を開催している。今回は伊豆半島ジオパーク推進協議会が共催した。

2017年8月23日
伊豆新聞　朝刊1面